

1-9			
主題	軽費老人ホームA型入居者の自立像と施設内活動における参加数の変化		
副題	気軽に、継続して、楽しく続けられるサークルや行事にするために		
キーワード1	軽費A型	キーワード2	自立像
研究期間	12ヶ月		
法人名	社会福祉法人 恩賜財団 東京都同胞援護会		
事業所名	軽費老人ホーム サンホーム		
発表者：戸端由美	アドバイザー：なし		
共同研究者：上野浩志			
電 話	042-391-3274	FAX	042-391-3366
今回発表の事業所やサービスの紹介	「サンホーム」は東村山市にあり、都内8箇所にある軽費A型老人ホームの一つで、同法人の特別養護老人ホーム「ひかり苑」との合築施設です。3階・4階合わせて50室で、食堂、男女の浴室は共用、居室は1部屋あたり6畳の広さで、ミニキッチン、トイレがあります。平均年齢：84歳、男女比：2：3。		

《1. 研究前の状況と課題》 軽費老人ホームA型（以後軽費A型とする）は施設内での自立した生活が可能な心身の状態であれば低額で安心した暮らしが可能な施設である。2015年6月時点での「平均入居期間」は6年で、最長は19年、10年以上の入居者は12名である。5年前と比べて自立度に大きな変化がないが、行事や活動の参加率に変化がある。 《2. 研究の目的ならびに仮説》 自立生活の継続と施設内活動の参加者との関係を明らかにし、有効的なサークル・行事活動の企画等に役立てる。 《3. 具体的な取り組みの内容》 1、自立度比較 2、入居者の世代変化 3、施設内活動参加者数の比較（2010年度・2014年度）	《4. 取り組みの結果》 1、自立度の比較 ①2010年、2015年の「障害者日常生活自立度（寝たきり度）判定」では、2010年6月のJランクは41名、Aランク9名、2015年のJランクは47名、Aランク3名。 ②2010年、2015年の「認知症高齢者の日常生活自立度判定」では、2010年6月のIランク3名、IIランク7名、IIIランク2名、2015年のIランク4名、IIランク9名、IIIランクなし。 2、入居者の世代変化 ①2010年の明治・大正生まれ27名、昭和・一桁生まれ19名、戦前・戦中生まれ4名。 ②2015年では、明治生まれなし、大正生まれ16人、昭和1桁生まれ21名、戦前生まれ9名、戦中、戦後生まれは2名だった。
--	--

3、施設内活動参加者数の比較

*参加者の増加

- ・音楽サークル・日帰り旅行
- ・お楽しみドライブ・調理支援・やきいも

*参加者の減少

- ・歩みの会・読書同好会・書道サークル
- ・体操クラブ・一泊旅行

*参加者の維持

- ・卓球同好会・麻雀同好会・カラオケ同好会
- ・詩吟サークル

《5. 考察、まとめ》

①終の棲家ではない軽費A型で暮らしている入居者は、自分で決めた日課を持ち、様々な自分スタイルで生活している。それらの継続は「生理的欲求の充足状態」であり、各々の自尊心の保持、自立生活の支えとなる。しかし心身の老化や病気の悪化によってそれらが継続されない時、軽費A型入居者は身体ケアレベルに応じた施設への転居が必要となる。「ここにいらなくなったら困る」「ここで健康に暮らしたい」その思いが根底にあるからこそ自律した自立生活が送れていると考える。それ故に今の安定した生活を壊さないようにと慎重に選択をするのが、行事やサークル活動の参加ではないか。今まで行えた運動やサークルも、「見えにくい」「聞こえにくい」「疲れやすくて回復が遅い」などの老性自覚の悪化から「無理をしたくない」思いが強くなる。また環境の適応力の低下や新しい事への不慣れから自尊心が崩される事を恐れる。失敗してそれを挽回する時間と体力がないため、人に迷惑をかけないようにと参加を控えたりするのではないかと考える。孤独にならずに、誰でも気軽に参加できるもの、継続的な参加が可能で「得意になれる」「自信が持てる」「人との繋がりができる」等の視点をもって、活動を考えていきたい。

②2010年の認知症生活自立度判定では、Ⅲランクが2名、Ⅱランクが7名。2015年にはⅢランクはいないがⅡランクが9名おり、2010年の方が認知症を持つ人への介護支援は高かったのではないかと。しかし大正生まれが多かった事で「年配者へのいたわり」の意識が多くの入居者にあり、認知症の症状だと思えることに遭遇しても、その人の尊厳に配慮のない態度はあまりなかったと聞く。

教育勅語が国民教育の思想的基礎として、S6年頃は神聖化されていたが、S9年頃には、関東大震災以降、徐々に道徳観が低下し、S12年からは戦時体制下の教育とへと移り、教育の低下の影響が考えられたとある。昭和世代の道徳観や、認知症に対する理解を求める取り組みをして、認知症など弱者の尊厳や「思いやり」や「いたわり」を伝える努力もしていきたい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究発表を行うにあたり、ご本人に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはない事を説明し回答をもって同意を得た事とした。

《7. 参考文献》

「老いのこころ」 佐藤眞一・高山 緑
増本康平[著]

「よくわかる高齢者の心理」 佐藤 勉
「高齢者の喪失体験と再生」 竹中星郎

《8. 提案と発信》

介護保険改正による特養の入居要件が要介護3になったことで、容易に特養へと移れなくなった。自律心をもって、今の自立生活を続けていく事、認知症を持つ人との穏やかな共生のためにも、高齢者・認知症の「こころ」に対する知識力を高めていく必要がある。